

〈研究論文〉

キャリア支援教育を軸としたピア・ラーニング授業の構築

－Microsoft Teamsを活用した同期型オンライン教育と対面教育の比較を通して－

大塚 薫

要 旨

本研究は、オンライン学習ツールとしてMicrosoft Teamsを活用し、遠隔地に点在する学習者が、いかに主体的に就職活動を見据えた授業に参画できるかを実践した上で検証し、教育現場での直接的な応用を目的としたものである。授業では、就職活動に不可欠な自己分析・企業研究・面接・エントリーシート作成に必要な日本のマナーや日本語の習得を目的に学習者主体のピア・ラーニング活動が実施された。

学習者の評価は5段階中4.72（2019年度同目的・内容の対面授業：4.21）で好評価を博し、特に学習者の授業に対する積極性や取組度に有意差が生じた。学習者は、日本の就職活動文化の理解が促進されるとともに、ペア・ワークや質疑応答の可視化という授業形態、オンラインの協働学習によるチームワークの形成、他者との討論や発表を通じて内省を促す効果に利点が挙げられた。

【キーワード】

ピア・ラーニング授業、同期型オンライン教育、キャリア支援教育、Microsoft Teams、学習者主体（アクティブラーニング）

0. はじめに

近年、ICT(Information and Communication Technology)技術¹⁾を駆使した遠隔教育方式は、インターネット速度及び移動通信技術の発達の影響を受け、次の段階を経て開発されてきた。

1. 1990年代中盤以降、電子メールや短文メッセージによる一方的な情報伝達事項のやり取りの形態を通じた遠隔教育への応用
2. 2000年代半ばにおけるSNS(Social Networking Service)の台頭に伴い、個人ホームページやブログ等を通じた掲示板の形態を利用した個人による遠隔教育サイトの発達(文字や写真等を通じた学習形態)
3. 2000年代半ば以降、サイバー大学等の専門的な遠隔教育サイトの発達(イ

インターネット動画を通じた授業の形態)

4. 2000年代以降、インターネット速度の急速な発達により、インターネット画像通話(Skype等)を利用した遠隔参加型チームティーチング授業の発達
5. 2010年代、3世代移動通信(3G)及び4世代移動通信(4G LTE)の発達とともにモバイル機器やスマートフォン端末の急速な普及を通じ、場所に関係のないモバイルメッセンジャー(LINE等)及びモバイルSNS、モバイル画像通話方式を利用した遠隔参加型グループ別授業の台頭
6. 2020年代以降、5世代移動通信(5G)の普及により小規模範囲の遠隔教育システムの運用からの急速な発展に伴い大人数授業への汎用化が起こり、様々な環境に応用できるシステム基盤の確立化

以上のようなICT技術の発達を基に、日本語教育分野においても現在までに様々な形態で実践的な研究(大塚(2015)、鄭他(2016)、大塚(2018)、毛利(2019))が行われてきている。また、2020年に蔓延した新型コロナウイルス感染症の影響によりオンライン学習ツール(Microsoft TeamsやZoom等)を活用したオンライン教育が全世界的に普及され、様々な国際共修の取り組み(高橋(2020)、畑中他(2021))やオンライン実践研究(斉木(2020)、澤崎2020)の事例が報告されている²⁾。

本研究は、オンライン学習ツールとしてMicrosoft Teamsを活用し、遠隔地に点在する学習者が、いかに主体的に就職活動を見据えた授業に参画できるかを実践した上で検証し、教育現場での直接的な応用を目的としたものである。また、従来実施していた対面教育と今回行われた同期型オンライン教育とを比較し、どのような利点や改善点があるのかやオンライン教育におけるピア・ラーニング授業のあり方についても言及していく。

1. ピア・ラーニング授業の概要及び実践状況

2020年度第1学期に行われた「コミュニケーション日本語Ⅰ」の授業において、交換留学生5名(中国4名、インドネシア1名)を対象としてピア・ラーニング授業がオンラインの同期型で実施された(〈表1〉参照)。

<表1> ピア・ラーニング授業の概要

授業科目名	コミュニケーション日本語 I
実施期間	2020年5月7日～8月6日 (13週間)
授業時間・回数	週1回90分全13回 ³⁾
授業場所	Microsoft Teams (オンライン同時配信(ライブ)型授業)
学習者	交換留学生5名 (中国4名、インドネシア1名)
学習者のレベル	日本語能力試験 N2～N1
授業方法	遠隔地に点在する学習者・教授者がTeams上で一堂に会し、ファイルの共有による教材の指導やペア・ワーク・討論等協働学習、発表

1.1 ピア・ラーニング授業の目標

2020年度第1学期は、新型コロナウイルス感染症の拡大により全学的に4月下旬からオンラインで授業が実施された。オンラインで授業を行うにあたり、推奨されたプラットフォームは、Microsoft TeamsとLMS (Learning Management System(学習管理システム))としてのMoodleであり、大学独自の教務情報システムであるKULASも併用された。そして、学生が学習を進める上でのインターネット環境の負担にならないようオンデマンド配信型授業が推奨された。

本授業は、国際連携推進センターが開講している日本語総合コースの授業であり、日本語課外補講の位置づけになるが、上級レベルの学習者を対象としている。そして、達成目標は、大学の講義・演習をこなすための日本語能力を習得するとともに、学生生活を送る上で必要なコミュニケーション能力を身につけ、考える力を養い、「スピーチ」、「討論」等の発信型スキルの向上を目指すことである。2019年度からは、文部科学省の最優先課題である「高度外国人材の日本企業への就職の拡大」を目的としたビジネス日本語教育を授業の中で展開している。そのため、就職活動に不可欠な自己分析・企業研究・面接・エントリーシート作成に必要な日本のマナーや話し言葉の日本語の習得を目的とし、学習者主体の双方向型の活動をベースに設計された。

本授業を受講した交換留学生の日本語レベルは、日本語能力試験N2からN1の中上級レベルであり、自国では日本語を専攻している学生であった。また、皆2019年10月に渡日し半年間は対面教育で授業を受けており、2020年4月からは2学期目にあたり、既知の間柄であった。そして、将来母国で日系企業や日本に関係のある企業への就職を希望する学習者が大多数を占めた。そこ

で、授業の目標としては、以下の3点を掲げピア・ラーニング活動を主軸に据えた授業を進めることにした。

1. 就職活動にふさわしい言葉遣いで、具体的なエピソードを交えながら自己PRを自信を持って述べるができる。
2. 就職活動に必要な幅広い語彙やフレーズを習得し、場面に適した定型表現や口語表現を使うことができる。
3. 日本の就職活動におけるマナーを理解し、適切に行動できる知識を身につける。

1.2 ピア・ラーニング授業の内容

本授業で使用したオンライン学習ツールとしては、Microsoft Teamsを活用し、Teams内に「コミュニケーション日本語Ⅰ」のチームを作成した。週1回全13回の授業はリアルタイムのインタラクティブな対話を中心に構成された。今回実施されたピア・ラーニング授業の内容は、〈表2〉のとおりである(〈表2〉参照)。

授業は、就職活動を始めるに際し、必要な知識と技術の両方を習得し、自信を持って就職活動に臨めるようになるため自己分析や企業研究がテーマに沿って行われた。自身の現在に至るまでの経験を振り返り、「成功体験」や「困難にあった経験」、「大学生生活で頑張ったこと」、「好きなモノ・コト」、「性格(長所・短所)」について分析し、自分に適した業種や企業を考えるために「キャリアプラン」を立て「企業研究」を行った。そして、最終発表として「自分の就職したい企業」を一つ選択し、その企業に関する情報を収集した上でその企業に適した「志望動機」をまとめた。

このように、記憶に残る自己PRができるようになるため、説得力のあるエピソードを踏まえた「志望動機」が作成できるよう順を追って下地を作る活動を行った。その上で、就職活動に必要な日本のマナーや適切な日本語表現を学んでいくという授業の構成にした。

<表2> ピア・ラーニング授業の内容

回	実施日	授業内容	回	実施日	授業内容
1	05.07	オリエンテーション・他者紹介(就職活動状況・就職希望企業)	8	06.25	「性格(長所・短所)」Ⅰ
2	05.14	「成功体験」Ⅰ	9	07.02	性格(長所・短所)Ⅱ・「キャリアプラン」Ⅰ
3	05.21	「成功体験」Ⅱ・「困難にあった経験」Ⅰ	10	07.09	「キャリアプラン」Ⅱ・「企業研究」Ⅰ
4	05.28	「困難にあった経験」Ⅱ	11	07.16	「企業研究」Ⅱ
5	06.04	「大学生生活で頑張ったこと」Ⅰ	12	07.30	「志望理由」・全体のまとめ
6	06.11	「大学生生活で頑張ったこと」Ⅱ・「好きなモノ・コト」Ⅰ	13	08.06	発表「自分が就職したい企業」
7	06.18	「好きなモノ・コト」Ⅱ	14	08.06	レポート提出「自分が就職したい企業」

今回のピア・ラーニング授業の時間配分を<表3>で示す(<表3>参照)。授業は、1課につき1.5コマ程度で進行し、教材はTeams上に掲載しておき、事前に予習しておくことを前提とした。テーマに対する質疑応答やよく使われる語彙及び文法事項を学習する際には、教材をPDFファイルにして電子化し、手書きで重要事項を書き込みながら確認した。その後、LINEの通話機能を介したテーマに関する話し合いがペアで行われた後、Teamsに戻ってきてクラスのメンバーで話し合った内容を共有した。情報共有をする際は、話し合った内容を相互に紹介しあい、他のメンバーからの質問に回答した。そして、授業の最後には「自分の就職したい企業」の概要や理念、事業内容、求める人材像、採用情報、同業種のライバル企業との違い、志望理由等についてのプレゼンテーションをし、面接さながら他のメンバーから質問を受け答え、発表に対する自己・相互評価を行った。

<表3> ピア・ラーニング授業の時間配分

<1コマ目>

回	時間配分	授業内容
1	10:30-10:50(20分)	前回の授業の振り返り(学生からの感想・質問に対するフィードバック)・ウォーミングアップ
2	10:50-11:00(10分)	テーマに関することば
3	11:00-11:30(30分)	テーマについて話す前の興味付けの話し合い
4	11:30-12:00(30分)	テーマに関する文型

< 2 コマ目 >

回	時間配分	授業内容
1	10:30-10:50(20分)	前回の授業の振り返り(学生からの感想・質問に対するフィードバック)・ウォーミングアップ
2	10:50-11:00(10分)	ペア・ワーク I
3	11:00-11:20(20分)	ペア・ワークで話し合った内容のクラスでの共有
4	11:20-11:30(10分)	ペア・ワーク II
5	11:30-11:50(20分)	ペア・ワークで話し合った内容のクラスでの共有
6	11:50-12:00(10分)	テーマに関するまとめ・課題と次回の授業の予告

1.3 ピア・ラーニング授業におけるオンライン学習ツールの活用

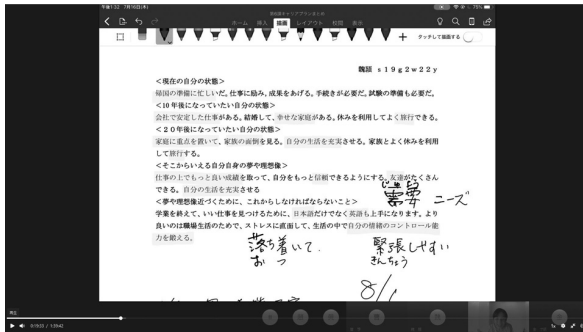
本授業は、コミュニケーション能力育成のための授業であるため、Microsoft Teamsを活用してオンライン同時配信(ライブ)型で行われ、インターネット環境が整っている学生は顔を見せながら授業が行われた。効率的な協働学習をするため、スマートフォンアプリのLINEを補助手段として活用し、授業のメンバーをLINEグループに登録した。これは、Teams上でトラブルがあった際の連絡手段として活用するとともに、ペア・ワークをする際にはLINEの通話機能を使用した。



<図1> Microsoft Teams上の「コミュニケーション日本語 I」トップ画面

教授者は、Teamsを運用するためのパソコンと教材を共有するためのiPad、不測の事態に備えるべくスマートフォンを常備した。ライブ授業をするための「会議」はメインで使用するパソコンで開いたが、もう一つのIDを準備しiPadから「会議」に接続して授業資料を共有するようにした。そうすること

で、学習者はパソコン上に教授者の顔と画面共有した資料の画面を同時に見ることができた。iPadでは電子ファイル化した教材を共有した上で付属のタッチペンを使用し、手書きで重要事項にマーキングしたり、フィードバックの添削を書き込んだりした。また、パソコンとiPadを同時に活用しているため、iPad上の画面を確認し学習者にどのようにTeams上の画面が見えているのかをチェックできるという利点もあった。さらに、インターネット環境に異変が生じた場合にすぐにバックアップできるようにパソコンを2台準備するようにした。そして、学習者が授業中に質問がある場合は、いつでもマイクをオンにして直接質問するようにしたが、その場で質問できない場合、Teams上のチャット機能やLINEを介して質問するよう促した。



<図2> iPadを用いた共有画面

2020年度第1学期間は、Teams上では機能上ペア・ワークやグループワークをするためのブレイクアウトルームを作成することができなかったが、その代用としてチャンネルをいくつか作成し、学習者がそのチャンネルに分かれて入室することでブレイクアウトセッションを行うことも可能であった。しかし、メインで開いている「会議」を抜けて新たにチャンネルに入り、そこで「会議」を自分たちで開く必要がある。そこで、メインルームの「会議」はそのまま維持して活動内容を共有し画面に映しておき、学習者が所有しているスマートフォンのLINEの通話機能を使用してペア・ワークやグループワークをするようにした。また、活動時間の表示もメインルーム上で行い、学生が活動を終了しメインルームに戻ってくる時間もわかるようにしたため授業がスムーズに進行した。

した(<表4>参照)。2019年度に同目的・内容で行われた対面授業においては、学習者の評価の平均が4.21であり、特に学習者の「授業に対する積極性」や「出席度」、「取組度」、「学びの習得度」と「教員の教授法」並びに「教員の学習者の困難点に対する理解」に有意差が生じた。一方、2020年度は「授業の課題量」が対面教育時より多くなった。そのため、2020年度の評価は4.2であり、2019年度の4.5より低くなっている。また、「教材の難易度」の評価は、両者とも同じ教材を使用したこともあり評価も同じ値になっているが、それ以外の項目では、おしなべて2020年度のほうが高い評価になっている。

<表4> ビア・ラーニング授業の評価

		5	4	3	2	1	2020平均	2019平均
1	授業に対する積極性	3	2	-	-	-	4.6	3.8
2	授業への取組度	4	1	-	-	-	4.8	4.2
3	授業への出席度	4	1	-	-	-	4.8	3.9
4	学びの習得度	4	1	-	-	-	4.8	4.2
5	日本語力の向上	4	1	-	-	-	4.8	4.3
6	授業の難易度	4	-	1	-	-	4.6	4.2
7	授業の課題量	3	-	2	-	-	4.2	4.5
8	教材の難易度	3	-	2	-	-	4.2	4.2
9	教員の教授法	5	-	-	-	-	5.0	4.2
10	教員の学習者の困難点に対する理解	4	1	-	-	-	4.8	4.1
11	教員の課題の説明	4	1	-	-	-	4.8	4.4
12	教員の熱心度	5	-	-	-	-	5.0	4.5
13	授業の満足度	5	-	-	-	-	5.0	4.2
平均							4.72	4.21

学習者の感想では、今回の授業の利点として「グループ討論は各自のLINEやチャットで行い、対面授業より他の学生からの騒音の妨害がない」、「グループワークによるリアルタイムのコミュニケーション方法が良い」、「授業では皆積極的に討論に参加した。皆が自分の意見を発表することができることは多くの収穫だ。雰囲気良く授業内容も面白い」、「教材を示しながら書き込んでくれるので、ホワイトボードがよく見えない心配がない。重点箇所を違

う色で表示してくれるので、わかりやすい」、「授業の録画を見ながら復習ができる」、「オンライン授業はとても便利で移動に使う時間を節約して、もっと多くの時間勉強できる」との意見があった。

一方、今回の授業の改善点としては、「ネット回線の状況で聞き取れないことがある」、「対面できないので、教師と他の学生と顔を合わせることができず寂しい」の2点が挙がっていた。

学習者の授業内容に関する感想では、「Teamsを通して日本語を勉強しても上達を感じた。授業中クラスメートや先生と交流しながら経験を分かち合うことができとても楽しい」、「皆と一緒に相談や討論をすることが楽しい。自分の考え方や気持ちを伝えながらコミュニケーション能力が鍛えられとてもよかった」というピア・ラーニング授業の有効性が述べられていた。

また、「この授業では、新しい言葉や文法を勉強しながら自分のことをもっとよく知る良い機会を提供してくれる」、「この授業を通して今後の人生について十分考えた。過去をよく思い出し次の目標を考えると、新しいモチベーションと自分に対する新しい認識が生まれる」、「この授業を通じていろいろな経験を思い出し、発見して、現在に至る自分の成功体験について自慢話にならずどのように自己アピールできるのかについて学んだ。就職する際に、非常に必要なことだと思う」のように自己分析をした上でいかに就職活動に活かせるのかを考える機会になったことが分かった。

さらに、「今回の授業を通して、自分だけではなく友達の頑張った経験を聞いてとても勉強になった。一人ひとりがそれぞれの目標や困難のために自分なりに努力した話を聞き、自分ももっと頑張らなければと感じている」とクラスメートの意見を聞き自身を振り返る様子が見ええた。

そして、「先生からのフィードバックとほかの学生の感想がとても参考になった。卒業後の人生が想像できず、不安で時折前に進むのが怖くなったが、今は自分の将来が少しずつ見えてきた。新たな人生の目標ができたので、それを実現するために努力したい」、「就活する際、就職したい企業についてしっかり調べ、その企業の基本的な情報をきちんと理解することがとても大事であることを学んだ。これから就活するとき、この授業で学習してきたことを活用していく」と自身のキャリアプランを見据え、就職活動に臨む心構えが形成されてきたことが見受けられた。

その他、「オンライン授業は課題の量が多く、ほかの学生や先生とのやり取りがほとんどなく、かなりストレスになっている。しかし、この授業は対面

でなくても普段行う授業でのやり取りが変わらず行われるので、精神的に安定した」という学習者間、学習者と教授者間のコミュニケーションがある種のカウンセリング効果になっている様子も見られた。

4. オンライン教育で行われるピア・ラーニング授業の考察

今回の授業は一学期間を通じてオンラインのリアルタイム型で実施されたが、2019年度の対面教育と比較して、クラスの一体感や授業に対するモチベーションの維持に大きな違いが見られた。2020年度は受講生が5名、2019年度は13名でありクラスサイズの問題もあったが、2020年度に行われたオンライン教育のほうが受講生が積極的に授業に参加し、主体的に取り組んでいた。

受講生の学習へのモチベーションが高くなった要因は、同期型のオンライン教育という授業形態が強く影響していると思われる。2020年度の同期型オンライン教育と2019年度の対面教育ともに授業の目的及び内容は同様であり、受講生も東アジア中心の日本語専攻の交換留学生が8割以上を占めた。また、学習者は将来、母国で日系企業や日本に関係のある企業への就職を希望する学生が大多数であった。2020年度に実施されたリアルタイム型のオンライン教育では、授業形態として反転授業によりそれぞれの学習者の発言の機会を保証し、主体的な自分の意見の発表の機会を増やしたこと、授業後にその日の授業の感想として振り返りの機会を作り、それに対するフィードバックを丁寧に行ったことが功を奏したと考えられる。さらに、ペア・ワークでの話し合いやクラスでの共有における発表や質問内容を可視化することにより理解が促進されるとともに、積極的に発言をせざるを得ない仕掛けづくりをしたことも役立ったと思われる。また、2020年度の受講生は皆10月に渡日しており一学期間を通じて対面での交流があり既知の間柄であった。そのため、オンライン教育に移行した後も対面での関係が保たれている上、少人数のクラスサイズであったので学習者間の連携意識がより高まりチームワークが形成されることで、学習に対するクラスの雰囲気づくりに貢献したと見受けられる。

このように、オンラインのライブ授業の長所を活かした授業設計並びに授業実践を行うことにより、学習者のニーズに合わせた満足度の高い授業が展開されることが明らかになったと言える。

一方、教授者にとっては、課題である振り返りシートや発表原稿を添削する際、Microsoft Teams上に課題を提出してもらうことにより翌週のオンライ

ン授業時に課題の修正箇所を共有しながら、その場で示しフィードバックすることが可能となり時間の短縮になった。また、学習者もリアルタイムでの課題の添削に対し質問がある場合、その場で教授者に尋ねることができインタラクティブなやり取りが生じた。さらに、欠席した学習者に対して授業の録画資料をTeams上で共有することで自律学習ができる上、授業の復習を兼ねて何度も録画資料を確認できるというメリットがあった。その他、その日の宿題や翌週の授業の予告等をインターネット上で周知することができ、課題の添削や欠席した学習者に対する個人的なサポートもTeams上でスムーズに行うことができた点は有用であったと言える。

問題点としては、学習者が短期滞在の交換留学生であったため、契約しているプランによっては月ごとにインターネット環境の制限があり90分間の授業を通してカメラをオンにすることができない学習者も一部存在した。そのため、最初の出席をとる際や発言をする際、最後の授業のまとめの部分ではなるべく顔を見せてもらうように試み、ともに学習しているという一体感を感じながら授業に集中できるよう促した。また、Teamsの仕様が何の前触れもなく変更する場合があります、会議への入室の仕方やサブで使用しているiPadの画面の共有の仕方が従来の方法ではできなくなり、戸惑う場面が何度か生じた。今回の授業ではオンライン授業のサポートをしてくれるティーチングアシスタント(TA)を呼び何とか対処できたが、教授者・学習者ともにITリテラシー教育の必要性を感じざるを得ない。

5. まとめと今後の課題

今回Microsoft Teams上で行われた同期型のピア・ラーニング授業は、2019年度に行われた対面教育と比較してインタラクティブなやり取りが学習者間並びに学習者と教授者間で活発に行われ、高評価を博した。学習者は、今回のピア・ラーニング授業を通して日本の就職活動文化の理解が促進されるとともに、ペア・ワークや質疑応答の可視化という授業形態、オンラインの協働学習によるチームワークの形成、他者との討論や発表を通じて内省を促す効果において利点が挙げられた。

今後も日本語教育分野においてオンライン教育の利点を活かした様々な形態の授業を展開していくとともに、遠隔地に点在する学習者と対面で教育を受けている学習者を繋いだ効果的なハイフレックス型授業の構築についても考えていきたい。

附記

本研究は、令和2-4年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号20K00886「国際共修による学習者主体の遠隔ピア・ラーニング授業の構築に関する実証研究」(研究代表者：大塚薫)の助成を受けて実施された研究である。

注

- 1) ICT (Information and Communication Technology) とは、藤本(2019)によると『『情報通信技術』のことで、中でもコンピュータやインターネットを活用する場合に使われることが多い言葉』である。一方、IT (Information Technology) とは、「情報技術の略で、ハードウェアやソフトウェア、インフラなどコンピュータ関連の技術そのもの」を示すとある。ICTは、「“Communication”という言葉が入っているとおり、情報を伝達することを重視しており、パソコンやタブレットPCなどの機器を導入し、接続回線(LANやWi-Fi環境)をととのえるだけでは、『ICTを利用している』』とは言えないとのことである。
- 2) 2020年7月29日付けの『朝日新聞』によると、「日本の大学が、COVID-19の影響を最も受けた項目は、オンライン授業の導入など『授業の実施方法』である」という。また、文部科学省によると、「2020年7月1日現在、全国の大学・高等専門学校の約6割が対面授業と遠隔授業を併用して授業を実施しており、対面授業のみあるいは遠隔授業のみを実施している大学はいずれも約2割である」とのことである。また、「2020年10月20日現在、9月時点において、対面教育の実施割合が半分未満と回答した大学・高等専門学校のうち約半数(50.4%)は、授業全体の半分以上を対面授業で実施している」と回答している。「残り(49.6%)の大学は、対面授業の実施割合は半分未満となっているが、このうち、『ほぼ全てまたは大多数の学生が、授業の形態等について理解・納得している』と回答している」のは、84.5%であった。
- 3) 国際連携推進センターが開講している日本語総合コースの授業は、1学期間15コマで編成されているが、2020年度第1学期は新型コロナウイルス禍の影響でゴールデンウィーク明けからオンライン教育で開始されることになったため、1学期間13コマで構成された。

参考文献

朝日新聞社(2020)「受験生の減少、退学・休学の増加…コロナ禍、大学を直撃」『朝日新聞』2020年7月29日

- <https://digital.asahi.com/articles/ASN7X7JJN7PULZU013.html> (2020.08.21閲覧)
- 赤堀侃司(2020)『オンライン学習・授業のデザインと実践』Jam House
- 大塚薫(2015)『遠隔チューター参加による少人数グループ化日本語授業の有効性に関する研究』平成23-26年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究課題番号23520634研究成果報告書
- 大塚薫(2018)『日本語ネイティブ遠隔参加型グループ別ピア・ラーニング授業の構築に関する実証研究』平成27-29年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究課題番号15K02640研究成果報告書
- 大塚薫(2020)「就職活動を見据えたピア・ラーニング授業の構築—Microsoft Teamsを活用した学習者主体の双方向型授業の取り組み—」第25回留学生教育学会年次大会proceeding、pp.61-62
- <https://jaise.org/taikai2020/archives/91>
- https://jaise.org/data/JAISE25-Research_Conference_Proceedings-r2.pdf
- 芥木ゆかり(2020)「ゼロ初級学習者のためのオンライン授業」第25回留学生教育学会年次大会proceeding、pp.53-54
- <https://jaise.org/taikai2020/archives/35>
- https://jaise.org/data/JAISE25-Research_Conference_Proceedings-r2.pdf
- 澤崎宏一(2020)「静岡県立大学US-COILのとりくみ—日本語COILと国内COIL—」ウェブマガジン『留学交流』2020年10月 Vol.115、pp.1-6
- 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子(2019)『国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂
- 高橋美能(2020)「多様なバックグラウンドを生かす国際共修授業の実践—オンラインで実施する授業のメリット・デメリット—」第25回留学生教育学会年次大会proceeding
- https://jaise.org/data/JAISE25-Research_Conference_Proceedings-r2.pdf
- 鄭恵先・菊池誠治・平山花菜絵・青木麻衣子(2016)「日韓混成グループによるオンライン協働活動を主軸とした課題解決型授業の試み」『日本語学研究』vol.49、pp.109-125
- 當作靖彦監修・李在鎬編集(2019)『ICT×日本語教育——情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』ひつじ書房
- 中野遼子・石倉佑季子・近藤佐知彦(2020)「留学交流へのCOVID-19の影響—7月調査の回答を中心に—」ウェブマガジン『留学交流』2020年09月号 vol.114、pp.26-42

- 畑中みどり・孟涛(2021)「国際化のニューノーマルに向けての中規模大学の取り組み」ウェブマガジン『留学交流』2021年2月号 vol.119、pp.1-7
- 藤本かおる(2019)『教室へのICT活用入門』国書刊行会
- 毛利貴美(2019)「Skypeによる遠隔セッションを取り入れた実践 Deep Active Learningの視点から」『ICT×日本語教育——情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』ひつじ書房、pp.68-83
- 文部科学省(2020)「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況(令和2年7月1日時点)」2020年7月17日
https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf(2021.01.15閲覧)
- 文部科学省(2020)「大学等における後期等の授業実施状況に関する調査(令和2年10月20日時点)」2020年12月23日
https://www.mext.go.jp/content/20201223-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf(2021.01.15閲覧)

おおつか かおる
(高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門准教授)